



Title	Studies on A Novel Strategy for Reversible Control of DNA Recognition by Peptide Ribonucleic Acids (PRNAs)
Author(s)	佐藤, 博文
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/535
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	佐 藤 博 文
博士の専攻分野の名称	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	第 1 8 6 6 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科分子化学専攻
学 位 論 文 名	Studies on A Novel Strategy for Reversible Control of DNA Recognition by Peptide Ribonucleic Acids (PRNAs) (ペプチドリボ核酸 (PRNA) による DNA の可逆的認識制御の新規方法論 に関する研究)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 井 上 佳 久 (副査) 教 授 野 村 正 勝 教 授 茶 谷 直 人 教 授 明 石 満 教 授 馬 場 章 夫 教 授 神 戸 宣 明 教 授 黒 澤 英 夫 教 授 松 林 玄 悦 教 授 真 嶋 哲 朗 教 授 安 蘇 芳 雄 教 授 田 中 稔

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ペプチドリボ核酸 (PRNA) という核酸認識分子において、従来の核酸認識分子にはない、外部因子による核酸認識の可逆的制御について新たな方法論をまとめたものであり、緒論、本論五章、結論から構成されている。

緒論では、本研究の背景、目的と意義、および研究内容の概略について述べている。

第 1 章では、四種の核酸塩基を有するペプチドリボ核酸 (PRNA) 単量体の合成、ならびに様々な塩基配列を有する PRNA オリゴマー合成への固相法の適用を検討し、固相合成法を用いた簡便かつ高収率な PRNA オリゴマー合成法開発について述べている。

第 2 章では、プリン・ピリミジン混合配列を有する PRNA の合成ならびにホウ砂を外部因子とした塩基部の配向変化・配向制御について詳細に述べている。

第 3 章では、D,L-イソグルタミン酸など異なる主鎖骨格を有する PRNA を合成し、主鎖骨格塩基部配向制御ならびに PRNA の高次構造におよぼす影響について明らかとしている。また、主鎖骨格の核酸認識に及ぼす影響についても検討し、右巻きの高次構造を有する D-アミノ酸骨格 PRNA がより効率よく核酸を認識することを明らかとしている。

第 4 章では、プリン・ピリミジン混合配列を有する PRNA の DNA との錯体形成・解離制御について検討し、いずれの PRNA においても相補的 DNA と安定な錯体を形成するが、ホウ砂添加により効率よく錯体解離を誘起できることを明らかとしている。また、PRNA の塩基配列認識能についても検討し、錯体安定性は PRNA-DNA 錯体の方が DNA-DNA 錯体よりもミスマッチ塩基に対してより敏感であることを明らかとしている。

第 5 章では、PRNA の錯体形成解離の可逆的制御について検討し、ホウ砂存在下、pH を外部因子とする塩基部の可逆的配向制御により錯体の形成・解離を可逆的に制御できることを明らかとしている。

結論では、得られた主要な成果とその意義をまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、核酸認識の外部因子による可逆的認識能制御という、従来ほとんど検討されることのなかった分野に新たな方法論を提供するものである。本論文では、核酸認識における塩基部の配向に注目し、外部因子によりヌクレオシドの塩基部配向を制御することで、認識能制御の機能を付与した核酸認識分子であるペプチドリボ核酸 (PRNA) の可逆的認識制御機能と、その方法論について述べている。ホウ砂を外部因子とした PRNA の塩基部の可逆的配向制御、さらには、プリン・ピリミジン混合配列による核酸認識の制御、可逆的錯体形成解離の制御について詳細に検討されており、得られた主な成果を要約すると次の通りである。

- (1) PRNA の固相合成法を開発し、PRNA オリゴマーを短時間かつ高収率で合成可能であることを明らかにしている。従来、PRNA オリゴマーは液相法により合成されているが、液相法では各ステップに、単離・精製操作が必要であり、配列を有するオリゴマー合成に時間、経験、労力が必要である。PRNA 固相合成法の開発によりこれらの欠点は克服され、配列を有する PRNA オリゴマーを短時間かつ高収率で合成可能であることを示している。
- (2) プリン・ピリミジン混合配列 PRNA においてホウ砂を外部因子とする塩基部配向制御について検討した結果をまとめている。プリン系ヌクレオシド誘導体のホウ砂を外部因子とした塩基部配向制御について検討し、プリン系ヌクレオシドを有する PRNA でもピリミジン系 PRNA と混合配列とすることで、溶液中の配向を制御可能であることを明らかにしている。
- (3) プリン・ピリミジン混合配列 PRNA における核酸認識能制御について検討した結果をまとめている。プリン・ピリミジン混合配列 PRNA において DNA とアンチパラレル配向で安定な錯体を形成するとともに、ホウ砂を外部因子とする PRNA-DNA 錯体の錯体形成解離が可能であることを明らかにしている。
- (4) ペプチド主鎖骨格キラリティーの PRNA 構造と DNA 認識に与える影響について検討した結果をまとめている。D-イソグルタミン酸を主鎖骨格とする D-PRNA オリゴマーは水溶液中で右巻きの高次構造を有することを明らかにした。核酸認識についても検討し、D-PRNA は L-PRNA に比べ、より安定な錯体を形成することを明らかにしている。
- (5) ホウ砂存在下 pH を外部因子とする PRNA の錯体形成解離の可逆的制御について検討した結果をまとめている。自己相補的配列を有する PRNA において、PRNA 二分子が錯体を形成し、ホウ砂存在下、わずか pH 7.2 から pH 6.0 の生体内 pH の範囲内で錯体の形成解離の可逆的制御を達成している。

以上のように、本論文はペプチドリボ核酸 (PRNA) という新しいカテゴリーの分子を用いることにより、従来の単なる核酸の認識から一歩進んで、これまで詳細に検討されることの無かった外部因子による認識の可逆的制御を行う新たな方法論を提案したものであり、具体例を用いてその有効性を実証している。この方法論は一般性を有し、機能性核酸関連分野における他の系にも応用可能であり、今後さらなる発展が期待できるものである。よって本論文は、博士論文として価値あるものと認める。